

Back Number

本論文は

# 世界経済評論 2022年1/2月号

(2022年1月発行)

掲載の記事です



世界経済評論

## 定期購読のご案内

年間購読料

1,320円×6冊=7,920円

6,600円

税込

17%

送料無料

OFF

富士山マガジンサービス限定特典

※通巻682号以降

定期購読  
期間中

デジタル版バックナンバー 読み放題!!



世界経済評論 定期購読



☎0120-223-223

[24時間・年中無休]

お支払い方法

Webでお申込みの場合はクレジットカード・銀行振込・コンビニ払いからお選びいただけます。  
お電話でお申込みの場合は銀行振込・コンビニ払いのみとなります。

Fujisan.co.jp  
雑誌のオンライン書店

## 生き物の絶滅

昨年9月末、アメリカの魚類野生生物局（U.S. Fish and Wildlife Service）は、「鳥、魚、その他合計23種の生物が絶滅したと見なす」と発表した。対象地域はグアムなどを含むアメリカ領地。根拠法は「絶滅危惧種法（Endangered Species Act）」。

絶滅した23種のうち11種は鳥、1種はこうもり、8種は貝類、3種は魚。「絶滅（extinct）」は、これまで「絶滅危惧（endangered）」と見なされてきた生物の存続確認手段を使い尽くしたので「絶滅」の範疇に入れたことを意味する。その以前絶滅と見なされてきたものは含まない。

### 象牙嘴啄木鳥

たとえば、鳥の中で8種はハワイ産だが、なかでKauai nukupuu はかつてはふんだんにいたのが、焼き畑式（slash and burn）で生息地を焼き続けたため、最後に見たとの報告があったのはアメリカがハワイを合併した翌年の1899年という。つまり、120年以上姿を見せなかったことになる。それでも「まだ存続しているかもしれない」というので、絶滅とはされていなかった。

また、今度絶滅したとされる鳥で一番名高く、ぼくの記憶に新しいのはアメリカ最大の啄木鳥 ivory-billed woodpecker（象牙嘴啄木鳥とも呼ぶべきか）である。ルイジアナ、フロリダ、テキサス、サウスカロライナに住んでいたが、これを最後に見たとの報告は1944年というから第二次世界大戦もたけなわのころだった。以後「絶滅危機」の範疇に入っていた。だが2004年、この啄木鳥を見て video を撮ったとする人が現れたので、本格的探索隊が組まれたが、存続は確定できなかった。

ちなみに、1930年代の調査によると、この啄木鳥は一对だけで42平方キロメートルの地域を

必要としたという。この鳥は日本最大の熊啄木鳥（クマゲラ）に比べて一回り小さいが、巣を作った沼沢地に生える大木などを伐採したため死に絶えた。クマゲラも同じ運命に遭わないよう望みたい。



佐藤 紘彰

### 無謀な殺戮

逆に、以前アメリカで絶滅とされていた passenger pigeon は今回のリストに入っていない。この鳩はかつてカナダとアメリカの中西部から東部に棲息、移動する時は雲霞のごとく空を暗くして地平線から地平線まで数時間にわたって覆い、無数の馬が走るような音をたてた、と1850年の体験を書き記した人がいた。1871年ウィスコンシン州の sandy oak barrens と呼ばれる2200平方キロメートルの地域に巣食った時は、1億4000万羽を数えたと推定されている。

しかし、そのころまでには乱獲撲殺で急減し始めており、1914年、シンシナティ動物園で最後の1羽 Martha が死んだ。29歳だった。

乱獲撲殺ではバイソンのそれも悪名高い。この雄々しい野牛は19世紀半ば迄膨大な大群を作って移動、馬に乗って大群の逆方向に向かって一日で尽きることができなかったという。ところが1880年頃までにはわずか100頭ほど残すほどに激減した。

毎年飛来する何百万の鴨その他の渡鳥の殺し方も想像を超えるものだった。たとえば特製機関銃を備えた小船を沿岸の鴨の群の中に押し出して殲滅する。そうした銃は swivel gun, punt gun, battery gun, the big gun などと呼んだ。このような商業用乱獲でなくとも無闇に殺した。浜辺の避暑ホテルに泊まった人が朝散歩に出かけたところ波際で長い嘴をつかって忙しく食べ物を探す鴨

の群を見かけた。そこで朝飯前の余興と皆殺しにしたと日記に記したという。

こういう鴨や鴨の殺戮を知ったのは、ぼくが妻としばらく夏休みをすごしたチェサピーク湾のヴァージニア東岸国定野生生物保護区 Visitor's Center に展示販売していた出版物である。

### 婦人の飾り

「絶滅危惧種法」は1973年ニクソン政権の下で成立したが、人間以外の生き物の保護の最初のアメリカ法は1900年に成立したLacey Actだった。これは動物ばかりでなく植物も保護したが、それを促進した理由の一つは婦人帽子製作者が美しい羽根を求めて白鷺 (snowy egret) その他の鳥を打ち殺したことにあった。

中で白鷺は絶滅を免れたが、アメリカの中西部、東部、大平原に住んでいたカロライナ・インコ (Carolina parakeet) は絶滅した。このインコはアメリカ原産の3種の一つだったが最後に見られたのは1918年だったという。もう一つの鸚鵡 thick-billed parrot はアメリカではいなくなり、南隣のメキシコに少数残っている。

そして、1916年、アメリカは陸続きのカナダと「渡鳥条約 (Migratory Bird Treaty)」を結んだ。この国がヨーロッパ大戦に参加する前年だった。ついで1918年にはこれを国内法として採択した。この条約と国内法制化の結果、それまで不倶戴天の仇として撲殺されて激滅していた鳥類のなかで鴟が大きくぶり返した——と、ぼくはそのことを賛歌する詩らしきものを書いたことがある。1980年ごろだった。それは、ある夕方マンハッタンの上空を覆うように大勢の鴟が飛び続けたのを見惚れたからだ、いかんせん。そのころずっと前に鴟殺しは再開していた。その主体は空港である。

今も覚えている方々がいるだろう。2009年1月、ラグアルディア空港を飛び立った旅客機のエンジンの一つが飛行する一列のカナダガン

(Canada geese) を吸い込んで、ハドソン河に不時着した。これは後にクリント・イーストウッドが映画化した。この事故のためNY市近辺の三大空港の鳥撲滅係がその仕事に更に力を入れ、その結果、その後8年間に、鴟、椋鳥、雁、その他の鳥合計7万羽を撲滅した、と2017年、APは報じた。

なるほど、北向きに空に開いているぼくのアパートの窓から時々南に向かうV型のカナダガンの一列が見えたのがびったり見えなくなった。ただ、空港周辺に広げると、雁の中では最大のこのガンをNY州は毎年17万羽を毒ガスその他で殺す——と2010年の報告にあった。

カナダガンは、いまではアメリカの北半分で留鳥となっているが、当初は北極に遠いところで育ちアメリカに飛来した。しかし、「渡鳥条約法」の保護対象とはならなかったのかどうか、殺戮乱獲が続き、1950年代の終わりにはほとんど絶滅とみなされるほどになった。だが、幸い1962年代の初めにミネソタ州に小さな群れが発見され、それを増殖、以後、増え続けた。そのためニューヨーク州自然保護省などは、これを「厄介者」とみなし、毎年多数の殺戮を認めていることは、いま述べた通りである。

### 唯一の元凶

同じ九月の初旬、国際自然保存連盟 (International Union for Conservation of Nature) は、世界的に14万種の生き物を調査した結果、過去500年間に902種の絶滅を確認したと発表した。ただ、現実にはそれを大きく上回る数が消えてしまったはずだ。理由は、存在が確認されていない生物は無数にあり、それらが記録されないままに死滅したと考えられているためだ。目下の絶滅率は「自然の」その1000~10,000倍という。

その原因はただ一つ、人間である。

さとうひろあき 翻訳家、コラムニスト在NY